

## 第1編 第6章

# 「文化」を前面に

2014～2019年度

第5章「人口8千人からの挑戦」では、2014年（平成26年）に8千人という当面の定住人口目標を達成した後、海外からの留学生招致など交流（関係）人口拡大に知恵を絞り、取り組みを進めた経緯を解説した。翌15年からは国が「地方創生」を本格的に展開し始めたことも追い風になり、東川町のまちづくりは一層独自色を強めていく。

このころは、基幹産業の一つである家具・木工業を介した家具デザイン文化や、「東川らしさ」の原点でもある大雪山文化の振興に力を入れた時期だ。町には、文化への投資を通じて地域の魅力や価値を高めれば、共感してくれる人が町外に増えて地域の経済に好循環をもたらし、ひいては住民の暮らしの向上につながるという考えがあった。

本章では、文化に主軸を置くまちづくりを本格的に進めた2010年代後半の様子を紹介する。



第6章 「文化」を前面に 2014～2019年度

## 第1節 地方創生で独自事業

### 総合戦略

2014年（平成26年）3月に写真文化首都を宣言した東川町は、同年9月から国が地方創生に大きく舵を切ったことを見て取り、翌15年度の機構改革で写真文化首都創生課を新設するなど（注1）、組織面でも地方創生への対応をいち早く整えていった。

そして町内外の有識者らでつくる委員会での論議や町議会との意見交換などを経て、15年10月に「写真文化首都東川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。これは「地方版総合戦略」ともいわれる町の将来計画で、この時点での町の課題を洗い出し、新たな目標などを定めた。

総合戦略で町は、将来目指すべき東川町の姿を「多くの人が集い、誰もが生き生きと暮らす文化あふれる写真文化首都の創造」などと明記し、2019年度（平成31年度＝令和元年度）まで5年間の具体的な政策目標を定めた。（注2）

### 新たな財源

地方版総合戦略の策定は「努力義務」とされたが、地方創生関連の補助金や交付金は、地方版総合戦略に基づいて自治体が策定する事業計画を国が審査し交付することに

（注1）写真文化首都創生課には総合戦略創生室や日本語学校推進室が置かれ、始まったばかりの地方創生関連の企画立案や、15年10月の開校が間近に迫っていた町立日本語学校の設立準備などを担当した。これらの立ち上げ作業が一段落した15年度末には、所管していた業務を企画総務課や交流促進課などに振り分けて解消されたため、わずか1年間だけ存在した課だった。

次々と新事業に着手していったこの時期の東川町は、業務の変化に合わせてひんぱんに機構改革を行っていた。のちの18年度（平成30年度）には、4月の機構改革で新設された東川ブランド発信課が半年ほどで東川スタイル課に改編された例もある。

（注2）総合戦略と同時に策定した「写真文化首都 東川町まち・ひと・しごと創生地方人口ビジョン」では、向こう半世紀にわたる超長期の将来人口を推計した。推計した結果は、起点となる2010年（平成22年）国勢調査での実人口7859人に対し、2040年の人口目標を4.0%増の8172人、2060年でも0.4%増の7893人とした。2060年に人口が増えるという目標を掲げた市町村は道内では東川町以外にはなく、話題を呼んだ。

なっていたため、事実上の前提条件でもあった。東川町の場合も、総合戦略の提出と合わせて事業計画を取りまとめ、国の審査を経たうえで新たな補助金、交付金が次々と決まっていった。

まず2015年度（平成27年度）分の地方創生加速化交付金として交付されたのが8千万円（実際の事業は16年度に実施）。翌16年度は地方創生推進交付金として第1次申請分で8280万円、第2次申請分として1570万円が交付された。

#### 2016年度の主な地方創生関連事業

事業名等	総事業費 (円)	事業概要
■地方創生加速化交付金 (2015年度より繰越)	80,000,000 うち交付金 80,000,000	・家具デザインスクール ・文化芸術交流センター備品 ・写真甲子園映画化ノベライズ本製作委託 ・外国人介護福祉士養成 ・文化芸術活動受入 ・情報発信 HP 改定
■地方創生推進交付金 (1次申請)	165,600,000 うち交付金 82,800,000	・デザインスクールによる高品質家具生産人材の育成 ・介護福祉士資格取得推進による安心生活環境の創出 ・健康促進プログラム策定による住民の健康増進 ・文化芸術活動を核とした創作活動受入体制の育成
■地方創生推進交付金 (2次申請)	31,400,000 うち交付金 15,700,000	・コミュニティカフェ（現・ひがしかわ食堂ワッカ）運営体制の構築 ・君の椅子地域外販売体制育成
■地方創生応援税制 (企業版ふるさと納税 2016年度採択)	18,520,000 うち企業版 ふるさと納税 10,000,000	・冬季海外観光誘客路開発事業（東川町国際フォーラムの開催） ・アルペンスノーボード国際大会（スノーボード国際カップ・イン東川） 開催事業

また、地方創生に取り組む自治体へ寄付した企業が税制上の優遇措置を受けることができる地方創生応援税制（いわゆる企業版ふるさと納税）でも、1千万円が認められた。企業版ふるさと納税はこの後、年を追って増え、大学や専門学校などに進学する学生に町から返済不要の奨学金を給付できるようになるなど、貴重な財源の一つになっていく。

写真甲子園の開催などを通じて企業とのつながりは進めてきたが、従来以上に幅広い業種の民間企業が東川町に関心を示すようになったのも、文化に重点を置くまちづくりを進めたこの時期の特徴だった。

東川町に限ったことではないが、地方創生関連の交付金は都道府県や市町村にとって、それ以前にはなかった新たな財源だ。一般会計の予算規模が70億円ほど（2016年度当初で71億6900万円）だったこの当時、自治体によっては億円単位の「収入増」を期待できる新たな交付金は貴重で、町にとって従来はできなかった新事業に乗り出すきっかけになった（注3）。

（注3）地方創生関連の交付金は、地方版総合戦略を基に策定する事業計画の内容を国が審査して決めるため、自治体間で差が生じた。このため全国的には都道府県や市町村の側から「不公平だ」「国が自治体間の競争をおおっている」といった反発も出た。

ただ、市町村別の集計が公表されていないためはっきりしないものの、東川町に交付された地方創生推進交付金は、本章執筆の2020年（令和2年）時点では、北海道や札幌市も含めた全道でトップクラスとされる。これは他市町村では実施していない独自事業が多い東川町のまちづくりが、「地域の活性化に効果がある」と国からもある程度評価されたためだとみられる。

## 3つの文化

一方、町の総合戦略で特徴的だったのは、写真文化首都として積極的に取り組むべき事項の一つに「文化」を掲げ、具体的に①写真文化②家具クラフトデザイン文化③大雪山文化—の3つの文化を挙げたことだ。これらの方針はのちの2019年度（令和元年度）には町の総合計画「プライムタウンづくり計画21-Ⅲ」（2019-23年度）にも盛り込まれ、町が取り組むべき重要施策の一つに位置付けられた。

そして町は、従来から力を入れている写真文化に加え、地方創生関連の新たな交付金をフルに活用する形で、家具デザイン文化や大雪山文化の振興に向けた施策を具体化していった。

## 織田コレクション



（注4）織田コレクションは東海大学名誉教授で椅子研究家の織田憲嗣氏（2002年から東神楽町在住）が、北欧を中心に優れたデザインの家具や日用品などを1970年代から収集した私的コレクション。いす1350脚をはじめテーブル、キャビネット、陶器、照明器具に加え、図面や文献、写真など総計2万数千点に上る。

織田氏が北海道東海大芸術工学部教授として旭川に赴任した1990年代から、どのように保管し後世に残していくのかが、旭川家具の関係者や東川町を含む関係自治体を交え、課題になっていた。

家具デザイン分野で新たに着手した事業としては、織田コレクション（注4）の公有化がある。

いすなど優れたデザインの家具を幅広く収集した織田コレクションは、20世紀の家具デザイン史を網羅的にたどることができる、国内はもとより世界的にも貴重な資料だとされる。旭川市、東神楽町とともに旭川家具の主産地の一つである東川町にとっても意義深いコレクションで、町は「町内家具クラフト産業のデザイン力向上に資する」と判断し、2016年度（平成28年度）から5年間でおおむね3億円分を購入する方針をたてた。合わせて作品のアーカイブ（保管）化も進めた。

背景には「旭川家具の業界全体にとっても貴重なコレクションを散逸させてはいけない」との考えもあり、将来的には関係団体や周辺市町などにも協力を求め、織田コレクションなど家具デザインに関するデザイン・ミュージアムの整備に発展させたい考えだ。

ただこうした構想には町議会で「町民の生活とは直接関係のない事業ではないか」「費用がかかり過ぎる」といった異論も出た。このため織田コレクション公有化に必要な費用は、先述した新たな財源である地方創生関連の交付金や「『写真の町』ひがしかわ株主制度」による寄付など町の負担が少なくなるよう工夫した。

## 著名デザイナーらを講師に

疑問視する町民もいたが、町が織田コレクション公有化という形で家具デザイン分野の振興に関与していったことは、町内で木工や家具、クラフト、デザイン関連の仕事に携わる関係者はもとより、全国の家具デザイン関係者の反響を呼んだ。この時点で町には、2006年度（平成18年度）に「君の椅子」事業を始めて以来、東川に関心を寄せてくれている国内外の第一線で活躍するデザイナーらとのつながりがあった（注5）。

君の椅子事業を通じて従来から培ってきた人脈に加え、公有化を機に町から文化芸術コーディネーターを委嘱された織田憲嗣氏が長年、文化・デザイン分野で築き上げてきた幅広い人脈が、新たに東川町とつながることになった。

地方の一自治体ではなかなか構築することが難しい豊富な人脈を活用して、町は2016年（平成28年）5月から、国内外の著名デザイナーらを講師に招き、東川町デザインスクールも開講することにした。

（注5）「君の椅子」事業を機に、国内外の著名デザイナーや建築家らが東川町と関わるようになった経緯は、総説第2章「魅力再発見」の第4節「新事業相次ぐ」で触れた。

### デザインスクール初年度開催一覧

実施日	テーマ	特別講師
5月30日（月）	北欧デザイナー日用品をより美しく、快適に。	ハンスウェグナーミュージアム学芸員、Ove Mogensen（オーヴ・モーエンセン）、Anne Blond（アンネ・ブロン）
7月3日（日）	UPRIGHT 開発物語	デザイナー 朝倉 芳満、ディレクター 柴原 孝
7月10日（日）	凹デザインという考え方	東京大学先端科学技術研究センター 教授 中邑 賢龍
9月19日（月・祝）	コミュニティガーデン コロニヘーヴ	日本コロニヘーヴ協会代表理事 Jens H.Jensen（イェンスイェンセン）
9月28日（水）	産業とデザイン	家具デザイナー 小泉 誠
10月14日（金）	コンクリートビジョンーリキッドストーンのデザイン	彫刻家・デザイナー Stina Lindholm（スティナ・リンドホルム）
10月29日（土）	カタチの生まれ方	木工家 高橋 三太郎
11月5日（土）	Yチェアの秘密	木工デザイナー 坂元 茂、編集者 西川 栄明
12月9日（金）	暮らしは「日常のプロジェクト」	ハースト婦人画報マダンリビング前編集人 下田 結花
1月14日（日）	椅子張りにおける伝統技術とその変遷	家具モデラー 宮本 茂紀
1月20日（金）	良質な光とは何か ポールヘニングセンの探求	ルイスポールセンジャパン 荒谷 真司
2月5日（日）	家具職人とのコラボレーションによる家具製作	建築家 中村 好文
2月19日（日）	世界のデザイン事業	デザイナー 喜多 俊之
3月5日（日）	日本のインテリアって何だろう	インテリア誌「コンフォルト」編集長 多田 君枝
3月19日（日）	素材が日本のトイレを進化させる	株式会社 LIXIL 鶴田 徹、谷口 慎介

16年度に始まったデザインスクールは、本章執筆の2020年度（令和2年度）時点も継続中で、19年度（令和元年度）末の時点では実に第61回まで開催された（注6）。毎回町内や旭川などから幅広く参加者を集めている

（注6）本章執筆の2020年（令和2年）6月時点では、新型コロナウイルス感染症対策のため同年3月以降に予定していた回が中止を余儀なくされるなど、影響を受けている。



2018年6月の第34回東川町デザインスクール。織田憲嗣氏（左端）が「スウェーデンのデザインとスウェディッシュ・グレイス展」と題して解説した

ほか、著名講師の時には札幌や首都圏などからもわざわざ聴講に訪れる人があるなど、家具や家具デザインに携わる全国の関係者の中では「東京でもめったに聞けない著名デザイナーの話を、なぜか北海道の東川で聞くことができる」などと高い評価を受けている。

半面、デザインスクールも織田コレクションも、家具やデザイン関係者を除けば、町民の暮らしに直接関わる事業ではない。このため町外での評価ほどには、町民の理解は進んでいないという指摘もある。



第6章 「文化」を前面に 2014～2019年度

## 第2節 文化と交流の拠点

### せんとびゅあ

(注7) 2014年(平成26年)10月に新校舎へと移転した後、東川小学校の旧校舎など施設、敷地の再活用は段階的に進んだ。まず移転から1年後の15年10月、町立日本語学校が開校し、校舎の主に2階部分が日本語学校の校舎として使われるようになった。16年1月には校舎内に、万一の災害時に町民が避難することができる東川町防災宿泊センターも開設された。そして16年10月の文化芸術交流センター、18年7月の写真文化首都創生館のオープンを経て、芝生広場や外構工事なども完了した2019年度(令和元年度)に再活用事業が完了した。

(注8) 「せんとびゅあ」という名称は、町や人々の活動の「中心」であることを意味する「セントラル」と、旭岳に代表される豊かで「純粹」な自然をイメージした「ピュア」の2語を組み合わせた造語。町民からの公募を経て命名された。



2016年(平成28年)10月15日、東川小学校の旧校舎を再活用(注7)した「東川町文化芸術交流センター」がオープンした。さらにこれと前後して、同センターに隣接するグラウンド跡に複合交流施設「東川町写真文化首都創生館」を建設する計画が具体化した。創生館は17年7月に着工、18年(平成30年)7月に開館した。

中心市街地に新しく誕生した両施設はその名の通り、東川町の文化や芸術を体験し、学ぶことができる拠点施設であり、町民や留学生、町外からの来訪者ら多様な人々が出会い、交流し、共に楽しむことができる新たな「場」になった。事業費は文化芸術交流センターが約10億円、創生館は約12億円に上った。

また創生館のオープンに合わせて両施設は「写真文化首都『写真の町』東川町複合交流センターせんとびゅあ」と改称され、文化芸術交流センターは「せんとびゅあⅠ」、写真文化首都創生館は「せんとびゅあⅡ」と呼ばれるようになった(注8)。

## 待望の「ほんの森」

せんとびゅあⅡには図書館的な機能が設けられ、「ほんの森」と名付けられた。それまで町内には、公民館（東川町農村環境改善センター）に隣接する東川町文化交流館に図書室があったものの施設が古く、閲覧する場所も手狭で、蔵書数も4万冊程度（2016年度末で41,099冊）にとどまっていた。図書館の新設は町民からの要望も多く、町は町図書館建設検討委員会を設置するなどして2015年度（平成27年度）から準備を進めていた。

こうしてできた真新しい「ほんの森」は町民待望の施設だった。ほんの森の蔵書数は開館した2018年度末で約5万7千冊、19年度（令和元年度）末時点では約6万2千冊と充実していき、せんとびゅあⅡ全体の利用者数も開館初年度（18年7月～19年3月末）の79,862人から2年目の19年度には19万830人に大きく増えた。（注9）。

またオープン2年目の19年度（令和元年度）からは芝生広場も開放され、家具・クラフト製品や地域の手作り作家の作品を集めた「ひがしかわART」（7月）、「新米×カレーフェス」（10月）など新たな催しが開催された。それぞれ町内外から数千人規模の集客を実現する人気ぶりで、町のイベント開催の幅を広げるとともに、せんとびゅあⅠ、Ⅱともに人々が自由に楽しく交流する場所として定着した。

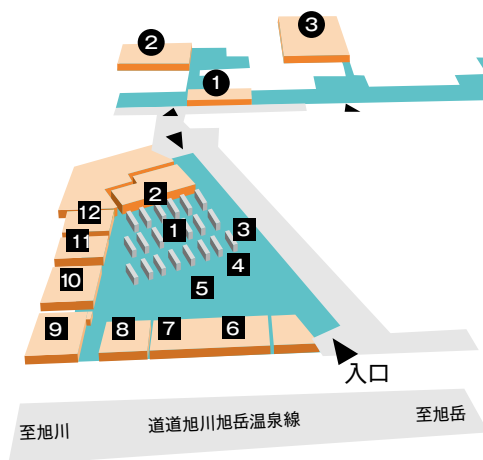
（注9）本章執筆の2020年度（令和2年度）時点では、せんとびゅあも新型コロナウイルスによる感染症対策のため一時閉館を余儀なくされた。年間の来館者数に影響する可能性もある。

### せんとびゅあⅠ

- ① ギャラリー1・2
- ② コミュニティホール ラウンジ
- ③ 講堂

### せんとびゅあⅡ

- ① ほんの森
- ② カウンター
- ③ 大雪山アーカイブス
- ④ 東川写真コレクション
- ⑤ 家具デザインアーカイブス
- ⑥ ショップ
- ⑦ セミナー室
- ⑧ 体験室
- ⑨ 多目的室
- ⑩ 子どもコーナー
- ⑪ 閲覧スペース
- ⑫ 学習室



せんとびゅあⅠとⅡの主な施設（2018年の開館時）。これら文化、芸術関連以外には日本語学校や防災宿泊施設が入っている



## 大雪山系の資料を一堂に

注10) 3つの文化のうち、残る写真文化の拠点としては1989年(平成元年)11月にオープンした東川町文化ギャラリーがある。文化ギャラリーは本章執筆の2020年度(令和2年度)に開館以来初となる大規模改修に着手した。



大雪山系に関する貴重な資料を集めた大雪山アーカイブス。「ほんの森」の書棚に取り囲まれるように、せんとびゅあIIの中心に位置している



移転新築され2019年にオープンした旭岳ビジターセンター。大雪山系に関する登山情報の発信拠点として広く利用されている

せんとびゅあIIは図書館としての役割に加え、東川町が重視する3つの文化(写真文化、家具クラフトデザイン文化、大雪山文化)のうち、写真文化を除く2つの(注10)文化の拠点施設と位置付けられた。このうち家具クラフトデザイン文化については、織田コレクションの一部や町内家具メーカーの作品を常設した。

大雪山文化については、東川町域にある旭岳(2,291m)など大雪山系に関する書籍や資料など約1500点(開館時)を集めた大雪山アーカイブスが開設された。前身は2016年(平成28年)10月にオープンした町文化芸術交流センター(現せんとびゅあI)内に設けられた大雪山ライブラリーで、18年7月のせんとびゅあII開館に合わせてIIに移転し、大雪山アーカイブスと改称された。

旭岳など多くの山々の名付け親になった小泉秀雄(1885~1945年)に関する史料をはじめ、大雪山に関する文献を一堂に集めた施設はあまり例がなく、講演会や企画展なども幅広く展開している。

また大雪山系に関する施設としては、町の旭岳温泉無料休憩所に併設する形で1983年(昭和58年)に道が開設した旭岳ビジターセンターが2019年(令和元年)6月、100mほど離れた旭岳温泉の道有林内に新築移転した。環境省が新たなエコツーリズムの拠点として約6億5千万円をかけ、17年5月から工事を進めていた。運営は東川町に委託された。大雪山系の動植物に関する展示や登山情報の発信に加え、自然観察ツアーや講演会など多彩な企画を展開。初年度は9カ月足らずだったにも関わらず、年間4万~5万人とした事前の想定を大きく上回る約6万8千人の利用があった。

## 貴重な資料を文化財指定

さらに、新道展会員として札幌を拠点に長く活躍した、東川町出身の抽象画家藤野千鶴子<sup>ふじのちづこ</sup>さん(2014年に77歳で死去)の遺族から、作品など約450点が町に寄贈されたことを受け、せんとびゅあIにギャラリーを設けて常設展示している。せんとびゅあIには多文化共生室も開設され、町民や留学生、町外から訪れる人たちの交流の場となった。



せんとびゅあⅠのギャラリー。壁面には町に寄贈された藤野千鶴子さんの作品が展示されている

せんとびゅあⅠ、Ⅱの整備が進んだこの時期は、織田コレクションや大雪山関連の資料、藤野さんの絵画など貴重な文化財が一気に集まった。このため17年度（平成29年度）末には、東川賞の歴代受賞作家・寄贈作品なども加えた1217点を東川町文化財に指定、登録した。

合わせて町指定文化財のデジタルアーカイブ（電子化保存）化も進め、19年度（令和元年度）からは町ホームページに東川町文化財デジタルアーカイブのページ（注11）を設け、公開している。

（注11）東川町文化財デジタルアーカイブのページは次の通り（2020年6月時点）。  
<https://higashikawa-bunnkazai-archive.jp/index.html>

### 東川町の文化財 【有形文化財】

指定番号	名称	数
1	相馬妙見宮	1
2	聖徳太子像	1
3	開拓記念碑（富山団体）	1
4	園田仁右衛門翁碑	1
5	岡本篤太郎氏碑	1
6	開拓記念碑（愛知県開拓）	1
7	土蔵	1
8	明治の家	1
9	大正の家	1
10	旧役場庁舎（東川町郷土館）	1
11	旧東川小学校	1
12	旧公民館（東町会館）	1
13	旭川電気軌道モハ101号（ちんちん電車）	1
14～70 422～543	織田コレクション	179
71～421	東川賞受賞作品	351
544～797	大雪山アーカイブス	254
798～1223	藤野千鶴子作品	426

### 【無形文化財】

指定番号	名称	数
1	東川氷土会	1

### 【無形民俗文化財】

指定番号	名称	数
1	北海道東川町郷土芸能 羽衣太鼓	1
2	東川町大雪山愛護少年団	1
3	ヌブリコロカムイノミ（山の祭り）	1

### 【有形文化財】

指定番号	名称	数
1	かしわ（群生）	1
2	五葉松（ヒメコマツ）	1
3	いちい	1
4	シンバク	1
5	まいたや	1
6	はいまつ	1
7	いちい	1
8	いちい	1
9	ミズナラ（群生）	1
10	東川町の地下水及び旭岳源水	1

※2018年3月末時点 ※太字は2018年3月30日付で指定



第6章 「文化」を前面に 2014～2019年度

## 第3節 競争の時代に

### 写真甲子園が映画に



映画「写真甲子園 0.5秒の夏」のポスター

(注12)、菅原浩志氏は1955年(昭和30年)、札幌市厚別区出身の映画監督、脚本家、プロデューサー。代表作に「ぼくらの七日間戦争」(1988年)や「早咲きの花」(2006年)などがある。

3つの文化の一つである写真文化振興の面でも大きな出来事があった。全国高等学校写真選手権大会(写真甲子園)がついに映画化されたことだ。写真甲子園は、町などで組織する実行委員会が1994年度(平成6年度)から開催している。出場した高校生たちのドキュメンタリーがテレビでは何度か番組化されるなどして、関係者の間には映画化を期待する声も高まっていた。しかし監督、出演者の人選や配給網、費用などの壁は厚く、実現していなかった。

ところが2014年(平成26年)8月、名水サミット出席のため松岡市郎町長が出張した山口県周南市で事態が急展開した。基調講演に登壇したのが札幌出身の映画監督菅原浩志氏(注12)で、講演を聴講した松岡町長が映画化について相談。興味を持った菅原氏は、翌15年夏の写真甲子園を実際に取材したうえで監督と脚本を引き受けることを決めた。菅原氏の人脈もあって制作会社なども決まり、15年10月に映画化が正式に発表された。

こうした動きを受けて町も、写真甲子園の映画化を側面から、しかし強力に支援することを決めた。制作発表から間もない2015年(平成27年)12月には、振興公社や商工会、観光協会など町内の主要団体に呼び掛けて「東川町『写真甲子園』映画化支援協議会」を設立。支援に要する

費用は、ふるさと納税のひがしかわ株主制度を通じて寄付を募るなど工夫し、写真甲子園を通じて関りのある企業にスポンサーになってもらうよう依頼したり、町内でのロケやエキストラの確保に協力したりと、さまざまな方法で映画制作を支えた。

## 著名俳優やアーティストも



映画「写真甲子園 0.5秒の夏」の完成を記念して行われたライブ。羽衣公園が聴衆で埋まった

映画「写真甲子園 0.5秒の夏」は製作シネボイス（東京）、配給BS-TBS（東京）で、2016年（平成28年）5月の写真甲子園初戦審査会での撮影を皮切りにクランクインした。本戦大会直前の7月下旬には、町農村環境改善センターにエキストラの町民ら延べ約300人を集めたロケも行われた。

映画は高校生役に若手俳優を抜てきしたほか、秋野暢子氏、千葉真一氏らに交じって、実際の写真甲子園で審査委員を務める写真家の立木義浩氏、竹田津実氏まで審査委員役で出演する話題作となった。17年（平成29年）10月の第30回東京国際映画祭で特別招待作品として上映された後、11月11日に道内、同18日に全国で上映開始した。

主題歌を担当した札幌出身のシンガーソングライターのおおぐろまき大黒摩季氏は、17年7月末のどんとこい祭りに合わせて、映画の完成を記念した無料ライブを開催。羽衣公園に約1万人が集まるにぎわいとなった（注13）。

このころは、映画や音楽などエンターテインメントの世界で活躍する著名人が、相次いで東川町と関わるようになった時期としても記憶される。

2016年（平成28年）10月には、シンガーソングライターの加藤登紀子氏（注14）が町文化芸術交流センター（現せんとびゅあ1）のこけら落としとして「百万本のバラコンサート」を行った。翌17年（平成29年）には東川を応援する歌「ここは地球のどまん中」を歌詞作曲し、町民や留学生らによるコーラスも交えた演奏がCDに収録された。

この歌はのちの19年度（令和元年度）、町内在住の写真家大塚友記憲氏が撮影した写真をあしらって動画に加工され、東川町の公式PV（プロモーションビデオ）として、動画投稿サイトYouTube（ユーチューブ）の東川町オフィシャルチャンネルで公開された。監督は「写真甲子園 0.5秒の夏」の菅原浩志氏が担当した。

（注13）旭川を含む道北地方で一度に数千人以上を動員する音楽公演は珍しく、過去には1980年代半ばから2000年代半ばまで、江丹別町など旭川市内に特設ステージを設けて開催されていた野外フェス「旭川ライブジャム」で、最盛期の1993年（平成5年）、96年ごろに1万人規模の動員があったという記録が過去の新聞記事などで確認できる。

羽衣公園の映画完成記念ライブは無料で、ライブ後の花火目当ての観客も多かったとみられるが、道北地方の音楽ライブとして空前の規模であったことは間違いない。一方、本章執筆の2020年（令和2年）、新型コロナウイルスの影響で音楽ライブなど人が密集する催しが次々中止されている状況を見ると、「絶後」となる可能性も否定できない。

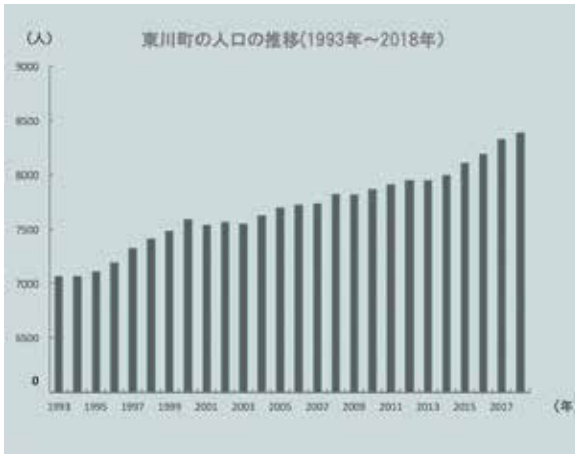
(注14)加藤登紀子氏は代表曲の一つである「百万本のバラ」(1987年)を通じて、東川町とつながりがあった。同曲の原曲「マールが与えた人生」は、北欧バルト三国のラトビアで1980年代初頭につくられた流行歌だ。作曲者である音楽家でラトビア文化相も務めたライモンズ・パウズ氏は文化相当時の1992年(平成4年)に来日し、札幌では加藤氏とも共演した。パウズ氏は東川町も訪れてピアノコンサートを開き、コンサートに感激した町民有志がラトビアの日本語学校(現・日本語文化学習所「言語」)支援の運動を始めたのが、2008年(平成20年)にラトビア・ルーイエナと町が姉妹都市になるきっかけだった。

こうした経緯もあって加藤氏は長年、東川町に関心を寄せてくれていて、雑誌などでもたびたび東川町のことを紹介してくれている

地方創生関連の交付金も活用して次々と新しい事業に乗り出した2010年代の後半は、せんとびゅあのオープンや写真甲子園の映画化など華々しい話題が相次いだ。発信力のある著名人が町を応援してくれることも増え、町の独創的な取り組みは従来にも増して注目を浴びるようになった。半面、全国初となる町立日本語学校の設立やデザイン文化の振興など、行政が担う「守備範囲」はますます広がっていき、同時に予算の確保など事業を実施する手法も次第に複雑化していった。

このため第1節でも指摘したように、町議会などからは「新しい事業に対する町民の理解が追い付かない」といったマイナス面も指摘されるようになった。町が取り組もうとする独創的な事業に対し、時として古くから住んでいる住民を中心に、戸惑いの声が出るようになったのもこの時期の特徴だ。

## 自治体間競争



東川町人口の推移。90年代半ばから増加している

(注15)住民基本台帳人口の推移を毎年末時点で見ると、高度経済成長期以降減少していた東川町の人口が底を打ったのは、1993年(平成5年)末で7063人。これが2018年(平成30年)末は8382人で1319人増、率にして18.7%も増えた。

ちなみに札幌市は同じ時期に172万2131人から195万5439人へと23万人以上も増え、増加率は13.5%だった。また東京都は毎年10月末時点の比較で、93年の1184万3612人から1384万3403人へと約200万人も増えたが16.9%増で、増加率だけなら東川の方が札幌、東京より高かった。

必ずしも響きのよい言葉ではないが、バブル経済が崩壊して日本全体が低成長時代に入った1990年代以降、都道府県や市町村の間でも「都市間競争」とか「自治体間競争」といった言葉が意識されるようになった。自治体運営が勝ち負けを競うようなものではないとは言ってもないが、経済が停滞し国民への分配のパイが小さくなるにつれ、所得水準や利便性、住みやすさなどさまざまな面から自治体同士も比較され、選別されるようになっていった。そうした状況下で多数から居住地として支持されたのが、道内では札幌であり、全国的には東京だった。

ところが東川町も、ちょうど自治体間競争が意識され始めたのと同じ90年代の半ばから継続的な人口増加を実現してきた(注15)。理由はさまざまあるが、根底にあるのは写真のまちづくりをはじめ他市町村にはない独自事業に挑戦し、それが町外を含めた幅広い層からの共感を集め、一部を移住者として定住人口に加えることができたためだ。

つまり住民の利害に直接関わる事業だけではなく、独創的な政策を工夫して東川に関心を寄せてくれる交流(関係)人口を町外に増やしていったことが結果的に、この低

成長時代の中で人口増加を実現し、ひいては既存住民の生活基盤を守ることもつながった。「東川らしさ」を大切にしつつ展開する独自のまちづくりは、これからも東川町の成長に不可欠だとも考えられる。

その意味では町が次々繰り出す新しい事業に関し、町民の一部から「難しい」「分かりにくい」といった声が聞こえてくるようになったことは重い。工夫を重ねれば重ねるほど複雑さを増す行財政運営に関する情報を、どのように町民に伝えていくのかは本当に難しい課題だ。

次の第7章では、海外からの留学生誘致などを通じてさらに独自性を増した財政運営の手法の変化や、福祉人材育成事業などへ発展していった政策面での広がり、他市町村や民間企業などとのつながりなどについて解説し、「第1編 総説」を締めくくる。

東川町と日本、世界の出来事 (2017-2018) ( は東川町関連)

年	月	出来事
2017 (平成 29)	1	米大統領にD・トランプ氏が就任。就任時の年齢は70歳7カ月で歴代最高齢 旭岳周辺の噴火に備える大雪山火山防災協議会が初の総会
	2	雪原を踏み固めて絵を描くスノーアート作品が町内のゴルフ場にお目見え。道内初。
	3	旧天人峡グランドホテル (2011年末閉鎖) の木造宿舍を国が解体強制執行
	4	フィギュアスケートの浅田真央選手が自身のブログで現役引退を表明 総務省がふるさと納税の高額な返礼品の見直しを指示、自治体は困惑
	5	環境省が旭岳ビジターセンターの移転新築工事に着手
	6	民泊を規制緩和する住宅宿泊事業法 (民泊新法) が可決成立。18年6月施行 東名高速道であおり運転などの妨害行為による死亡交通事故。あおり運転が社会問題化
	7	『映画『写真甲子園 0.5秒の夏』完成記念 大黒摩季ライブ 東川町よ熱くなれ!!』開催
	9	陸上100m男子で日本人初の9秒台。桐生祥秀選手 (東洋大) が9秒98を記録 町立日本語学校の留学生で、男子バレーボール台湾代表の陳建禎主将がヴォレアス北海道 (旭川) への入団を発表
	10	東川応援SONG「ここは地球のどまん中」のCDが完成。作詞作曲した加藤登紀子氏による記念コンサートも
	11	技能実習法施行。外国人技能実習生の対象職種に介護職を追加 映画「写真甲子園 0.5秒の夏」が公開 町商工会がポイントカードのももんカードを刷新。HUC (フック) カードに 町などで作る実行委が東川地域クラウド交流会を初開催 大相撲の横綱日馬富士が引退。同僚力士に対する暴行事件で引責
	12	新語流行語年間大賞に「インスタ映え」など。「付度」も 将棋の羽生善治棋士が永世七冠を達成。史上初 東川暮らし体験館がオープン。道警宿舍だった旧道営住宅を改装
	2018 (平成 30)	2
4		町内の幼小中高校で異文化理解を深める新教科「Globe(グローブ)」の授業がスタート 韓国の文在寅大統領と北朝鮮の金正恩朝鮮労働党委員長が板門店で南北首脳会談
5		大雪山系周辺のアイヌ民族文化が文化庁の「日本遺産」に認定 町が第10回日本マーケティング大賞の地域賞を受賞
6		トランプ米大統領と金正恩委員長がシンガポールで米朝首脳会談 2013年の土砂崩れで通行止めになっていた天人峡羽衣の滝遊歩道が5年ぶりに通行再開 2016年に生まれた子どもの数が1899年の統計開始以来初の100万人割れ。厚労省が発表 28日から7月8日にかけて西日本の広範囲に豪雨被害。死者・行方不明者200人超
7		(6日) 一連のオウム真理教事件で、法務省 (上川陽子法相) が死刑囚7人の死刑を執行。26日にもさらに6人の死刑を執行 複合交流施設せんとびゅあIIがオープン。文化芸術交流センターはせんとびゅあIに 全道の高齢化率が初の30%超え、1月1日時点の住民基本台帳調べで30.5% 異例の猛暑。25日から8月1日まで8日連続真夏日。29日の35.8度は観測史上2位、31日の34.9度は同3位
8		(17日) 大雪山系の黒岳、旭岳の山頂付近で真夏の降雪。記録が残る1974年以降で最も早い 東川町LINE@「おいでよ ひがしかわ」配信開始
9		(6日) 北海道胆振東部地震。胆振管内厚真町で道内で初めて震度7を観測。大規模な土砂崩れなどで死者40人、負傷者700人以上。北海道全世帯295万戸が停電するブラックアウトも テニスの全米オープンで大坂なおみ選手が初優勝。4大会を初制覇
10		東京都中央卸売市場が中央区築地市場から江東区の豊洲市場に移転 郷土芸能の羽衣太鼓が誕生から50年。保存会が記念演奏会
11		旭川空港の国際線ターミナルビルが開業。年間50万人の受け入れが可能に 博覧会国際事務局が総会で2025年万国博覧会の大阪開催を決定 入管難民法改正案が可決成立。19年4月施行。外国人労働者の受け入れ拡大へ規制緩和
12		キャンモアスキービレッジにペアリフトを増設 東川、鷹栖、幌加内の3町と介護関連8施設が、外国人介護福祉人材育成支援協議会を設立 岡山、兵庫など全国5市町と東川町が「文化と教育の先端自治体連合」設立